

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 5 月 19 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H01618

研究課題名（和文）古代東アジアにおける建築技術体系・技術伝播の解明と日本建築の特質

研究課題名（英文）Elucidation of architectural technology system and technology diffusion in ancient East Asia and characteristics of Japanese architecture

研究代表者

海野 聡 (UNNO, Satoshi)

東京大学・大学院工学系研究科（工学部）・准教授

研究者番号：00568157

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 10,400,000円

研究成果の概要（和文）：古代の日本建築の特質について、東アジアの視点から現存建築・文献史料・発掘資料を用いて解明しようとするものである。地方官衙や寺院建築の技術を通して、高級建築技術については、中国から技術伝播が窺え、組織的な造営体制のもとで、日本国内で中央から地方に技術が広まったことが明らかになった。文献資料の検討、現存建築・絵画・彫刻資料の調査、発掘遺構の集成と分析によって、東アジアにおける古代建築の技術体系の再構築を図った。渡航制限がなされる中で、これらの研究を「技術伝播」を核とした東アジアでの国際研究集会を通じて、研究ネットワークを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古代東アジアの建築技術に関して、日中韓の三国において、研究対象となる史料が現存建築・発掘遺構・絵画資料・文献史料を横断的に扱う有効性が明らかになり、同様の研究手法を適応吸うことが可能であることがわかった。これらにより、国内的な研究の深化と国際的な視座の共有の二層による研究が重要であることが示された。また本研究によって、日中韓の国際的研究協力関係がより強固になり、研究代表者がキーパーソンとして、今後も研究活動、国際協力関係を続ける素地を築くことができた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to elucidate the characteristics of ancient Japanese architecture from an East Asian perspective using existing architecture, documentary historical materials, and excavated materials. Through the construction of local government offices and temples, it became clear that high-class building technology was transferred from China, and that the technology spread from the central part of Japan to the local areas under an organized construction system. Reconstruction of the technical system of ancient architecture in East Asia was attempted through examination of documentary materials, investigation of existing architectural, painting, and sculpture materials, and collection and analysis of excavated remains. In the midst of travel restrictions, we built a research network through international research meetings in East Asia centered on "technology diffusion".

研究分野：日本建築史

キーワード：古代建築 木造 技術伝播 屋根架構 発掘遺構

1. 研究開始当初の背景

海野は古代建築史の研究を継続的におこなってきており、研究の着想はこれらの既往の成果にもとづいている。本研究は海野の既往の科学研究費研究(2014~2017年度、若手研究A、古代東アジアにおける建築技術の重層性と日本建築の特質)の成果を受けて、さらに研究の発展が見込まれてきた。これらの既往の研究によって、下記の3点がおもな成果として得られており、これらが本研究の開始当初の研究状況である。

(1) 建築技術

奈良時代建築の代表である唐招提寺金堂(2000~2009)・薬師寺東塔(2009~)などの解体修理を通じて、古代建築の技術が解明され、意匠と構造の関係を再検討する素地が整ってきた。おもに 現存建築、絵巻・石窟等の建築表現、 発掘遺構の検討を通して、

現存建築、絵巻・石窟等の建築表現 現存古建築や絵巻などの建築描写で、妻梁・台輪・詰組、床束、壁面構成の構法の技術に着目すると、日中韓で古代東アジアの技術の共通点と特異点がみられた。この共通点は技術伝播によるものと推察され、特異点からは別の技術伝播のルートの存在が想定され、技術伝播を核とした東アジア建築技術の体系的理解の可能性を考えるに至った。

発掘遺構 近年、発掘調査の増加に伴い、古代建築の情報が増加しており、発掘遺構の体系的な整理による建築情報の抽出・集積作業が進み(海野2014~2017、箱崎2015~)、日本の発掘遺構をもとにした建築史的な研究をする準備が整いつつある。特に古代寺院に関しては、日韓で比較することで、その特質を明らかにした。これを継続し、日本の郡庁を対象に、その収集に努め、既往研究の成果と合わせ、日本における発掘遺構を用いた建築史学的研究手法の確立できると推察され、中韓においても同じ手法が活用できるという見通しが立った。

(2) 造営体制

海野は文献資料から奈良時代の造営組織と維持管理の体制を検討し、造営体制の理想と実態、維持管理の概念の萌芽と実態を明らかにした。この手法は中韓にも適用できるという考えに至った。文献史料の精読と分析を通して、律令体制の下で、七世紀から九世紀初頭にかけて、造営体制が変遷していることが明らかになっておきており、同様の手法が東アジアにおいても展開可能ではないかと着想した。技術伝播において、社会システムとしての造営体制の影響が解明のカギになると考えた。

(3) 儀礼

古代建築の仏教修法や宮殿儀礼に関する研究は多くあり、共食儀礼や内裏・政庁域における儀礼を通して、儀礼が単なる使用法に留まらず、建築・空間の設計に繋がる重要な要素であることが明らかになっている。これらの研究の有用性から、東アジアで建築的な共通点の多い古代宮殿に絞ることで、中韓の儀礼と建築の関係を明らかにできると考えた。

以上のような研究成果を踏まえ、同様の研究手法を基盤としつつ、東アジアレベルで、古代建築について、技術・造営体制などの研究を進めることで、技術伝播や日本建築の特性が明らかにできると考えた。

2. 研究の目的

古代の日本建築には宮殿・官衙・寺院建築などの高級技術と倉庫や高床式住居などの普及技術の2系統の存在したことが、海野2006~2016ほかの研究によって、現存建築・文献史料・発掘資料から判明している。そして近年、高級技術については、中国から技術伝播が窺え、組織的な造営体制のもとで、日本国内で中央から地方に技術が広まったことが明らかになった。

これらを踏まえ、本研究では、古代建築史を建築技術(現存建築等と発掘遺構の分析)、造営体制、儀礼の3つの視点をもって、文献資料の検討、現存建築・絵画・彫刻資料の調査、発掘遺構の集成と分析により、東アジアにおける古代建築の技術体系の再構築を図る。これらの研究を「技術伝播」を核とした相互の融合を図る。これを通して、東アジアにおける日本建築の特質を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

3つの研究目的に応じて、研究の方法を

まず、建築技術の検討では、現存建築・絵画・彫刻等による建築技術の解明・発掘遺構の集成と分析を中心に据えた。既往研究で有効性が確認された、高級建築と普及技術、日本と東アジアという2軸をもって、東アジア建築史を捉える。さらに本研究では、既往研究を継続して、古代建築を中心に、中世初期への時代的な展開を見越して、調査対象に加えた。また墳墓壁画や絵巻物、石窟寺院なども組物や細部については、その描写自体がデフォルメされ、実際の建築とはことなる情報である可能性も含め、個々の史料批判を加え、技術的検討をおこなった。

また普及建築技術の比較を行い、東アジアにおける日本建築の特質に着目し、具体的には、在地技術の比較として、倉庫建築を検討の対象とした。これらの具体的な技術の検討に当たっては、現地調査をおこない、日本と東アジアの建築を比較することで、伝播する技術、伝播の方法、経路などについて、考察した。

また日本国内の発掘遺構の検討を通して、中央と地方の技術技術の伝播を検討した。この手法は既往の科学研究費研究（海野科研若手 A、2013～2016）において、国分寺・国庁を対象とし、手法を確立しており、この範囲を拡大することで、推定郡庁について、正殿・脇殿・遮蔽施設・門といった郡庁を構成する建物の建物規模・基礎構造・基壇の仕様・葺材・基壇の出・造営工程の6点などの情報に着目して整理した。これに基づき、郡庁同士、郡庁と国庁の比較を通して、技術的な共通点と差異を比較し、在地特有の普及技術とその特殊性を明らかとすることをめざした。これらの技術的な共通点や各国の独自の特徴を国際シンポジウムを通じて、検討した。

そして文献史料による東アジアにおける造営体制の解明については、日本の文献資料を丹念に解読することで、造営体制や維持管理といった側面の情報を抽出できることが明らかになっている。この手法を中韓に展開して適用し、文献資料をもとに、造営体制に関する歴史的研究を東アジアレベルで検討した

韓国については、先行研究として、まとまった先行研究を含め、韓国の研究者へ今日屋を依頼し、国際シンポジウムによって、その共通点・相違点を明らかにした。

中国についても、建築技術書である营造法式（12世紀）は組織的な建設工程との関係が深いと推察されたため、この周辺の時代における造営体制を検討し、造営体制を同じく国際シンポジウムによって検討した。

さらに文献・絵画資料に基づく東アジアにおける宮殿儀礼の検討については、日本の宮殿儀礼について、内裏式などに記された儀礼の内容の解読や絵巻等に描かれた様相をもとに、建物の平面と合わせて考察することで、建築史的な検討をおこなった。

4. 研究成果

本研究では、多くの研究成果が得られており、その全貌は多岐にわたるが、その根幹となる国際シンポジウムを中心的に取り上げ、研究成果を示したい。

第1回 国際学術会議 古代東アジアの造営体制に関する学術会議

「古代東アジアにおける建築技術体系・技術伝播の解明と日本建築の特質」

日時：2019年1月12日13:00～18:00

この国際学術会議は次の開催趣旨のもと、日中韓の三国の研究者による発表と、その後の総合討議による構成で、韓国ソウルにおいて開催した。

古代日本の造営体制や維持管理に関しては、文献資料から情報を抽出できることが明らかになっている。いっぽうで中国や韓半島の造営体制に関する情報は日本国内において十分に明らかではない。

そこで中国・韓国の造営体制について、先行研究の紹介から現在の研究状況を講演いただき、東アジアでの研究比較の第一歩とすることを目的とした。特に中国については、建築技術書である营造法式（12世紀）は組織的な建設工程との関係が深いと推察され、この周辺の時代における造営体制も視野に総合討議を通して、東アジアにおける造営体制に関する研究の現状を共有し、相互理解を深めることを目的とした。

日中韓の三国の研究者による発表と、その後の総合討議を通して、古代東アジアにおける造営体制の共通点と違いを明らかとした。



2019年1月のシンポジウムの様子

第2回 国際学術会議 古代東アジアの重層建築に関する学術会議

「古代東アジアにおける建築技術体系・技術伝播の解明と日本建築の特質」

日時：2019年10月20日(日)13:00～18:00

この国際学術会議は日中の二国の研究者による発表と、その後の総合討議による構成で、中国天津において開催した。

開催趣旨は次のとおりである。塔婆をはじめ、古代東アジアにおいて重層建築に対する志向は共通するものがあつた。現存する石塔・木塔はもちろん、浄土变相図をはじめとする絵画にも楼閣や塔が描かれることは少なくない。この重層建築の建築技術は、東アジアにおける技術伝播や受容の有無を検討する有効な対象である。

韓国には古代の重層建築が現存しないが、日本には奈良時代以前の重層建築が塔を中心に現存し、中国には開元寺鐘樓や独楽寺觀音閣などが現存する。両者の建築には共通点もあるいっぽうで独自の技術も多い。本国際学術会議では、重層建築を構築する技術に関して、日中相互の建築を対象に、両者の共通点や設計方法、技術について比較検討し、古代東アジアの建築技術の一端に迫ることを目的とした。

日中の二国の研究者による発表と、その後の総合討議を通して、古代東アジアにおける建築技術の共通点と違いを明らかとした。特に現存建築が多く残る日本についての腰組と柱盤による技術的な細部の違いの詳細な検討が、中国において新たな研究の視点になることが確認された。



2019年10月のシンポジウムの様子

古代東アジアの建築技術・情報に関する国際学術会議

日時：2023年3月5日(日)13:00~18:00

この国際学術会議は日中韓の三国の研究者による発表と、その後の総合討議による構成で、韓国光明市において開催した。

開催趣旨は次のとおりである。現存最古の木造建築である法隆寺をはじめとする日本の古建築や発掘遺構・出土遺物等から古代東アジアの建築技術の交流が活発であったことが知られている。いっぽうで継承されなかったとみられてきた技術もあり、日本の代表的な事例のひとつが両層閣額という頭貫の下に水平材であったが、近年、薬師寺東塔の解体修理によって、その存在が確認された。これをもとに12世紀以前の貫に関する再検討が進み、新たな視座が提示されている。

東アジアの建築技術の観点から捉えると、貫は中世以降の禅宗様や大仏様の展開との関連で着目されることが多いが、古代においても建築技術の伝播をうかがう重要な指標である。そこで日中韓の貫状の材を中心に、12世紀以前の建築技術の交流と伝播について、東アジアの視点から検討した。

日中韓の三国の研究者による発表と、その後の総合討議を通して、古代東アジアにおける建築技術の共通点と違いを明らかとした。また同様の視座からの各国での再検討の有効性が確認された。



2023年3月のシンポジウムの様子

第二回 国際研究集会 御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地

「東アジアにおける建築生産史と工匠史料」

日時：2021年12月18日(土)10時~16時48分

本科研以外に、京都府立京都学・歴彩館、東京大学史料編纂所「天皇家・公家の「知」の体系としての文庫・宝蔵研究拠点創設」プロジェクト、科学研究費・基盤研究(S)「天皇家・公家文庫収蔵史料の高度利用化と日本目録学の進展 知の体系の構造伝来の解明」、公益財団法人陽明文庫、科学研究費・基盤研究(A)「摂関家伝来史料群の研究資源化と伝統的公家文化の総合的研究」による開催

この国際学術会議は午前の「発掘調査の成果・文献史料の見直し・復古建築との比較による、平安期の宮殿(内裏・里内裏)・寺院造営の最新研究」と午後の「宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」の新知見と東アジア建築生産史と工匠史料の展望」の2部からなる。本研究にかかわる部分は、午後の部の後半の「東アジアにおける建築生産史と工匠史料」で、日中韓の三国の研究者による発表と、その後の総合討議による構成で、京都学・歴彩館において開催した。

開催趣旨は次のとおりである。古代の技術伝播などの状況が特殊な状況であるかについて、検討するため、近世の東アジアの工匠史料に関する国際研究集会を開催した。その目的は以下のとおりである。

近世日本の建築生産史については、先行研究により中井家による畿内・近江6カ国の大工・大鋸の支配を中心に工匠組織の解明がなされてきた。これに加えて、入札・請負制度が広がっていったことが知られる。いっぽうで、設計・積算・材料供給・工匠差配などの造営現場における情報伝達や建築図と現場史料の関係については不詳であった。内匠寮本「中井家文書」は図面・帳簿・行政的な文書類などから構成されているが、工匠関連史料としてみた場合、建設の詳細を記録した帳簿類は史料の性格が特殊であり、それが継承されてきた意義は大きい。すなわち中井家という特殊な工匠家の史料である点を考慮する必要があるが、継承されてきた意義を鑑みると、生産史との関連では、入札・請負において過去の事例を参照することが有効であったとみられ、工匠関係史料の保存・継承と建築生産史の密接な関係が窺える。これらを通して、建設現場において必要な情報（絵図・帳簿等）の解明という道筋がうかがえる。

また近代以降の工匠用語を含む辞典類でも帳簿類は参照されていないため（『日本建築辞彙』他）近世以前の工匠用語が明らかではない。帳簿類にはこれらの辞典類には登場しない工匠用語も多く含まれ、その中には近代以降に失われた技術・技法の記載もあり、近世以前の造営現場における実態を窺う有効な史料である。

東アジアにおける建築生産史研究の可能性としては、工匠史料を通して、各国の史料保存・継承の意義、現場で必要とされる史料の構成要素の観点から、建築生産体制の違い・工匠の職掌・技術継承のありかたを比較することで、近世日本の建築生産の特質を窺いたい。この視座は近代以降の日本の建設体制との関連の解明という展望を備えている。

本国際研究集会での議論を通じて、各国の工匠関連史料及び、建築生産史の研究の現状を相互に理解し、東アジアの建築生産史を工匠関連史料から再構築する糸口を見いだせることを期待し、国際研究集会を開催した。

日中韓の三国の研究者による発表と、その後の総合討議を通して、古代東アジアにおける建築情報と技術の共通点と違いを明らかとした。また同様の視座からの各国での再検討の有効性が確認された。

この近世の建築生産史に関する研究会を通して、本研究が主たる対象とする古代にとどまらず、近世まで通史的に捉え、東アジアの建築術の伝播と独自性を俯瞰的に見ることが新たに必要の研究であることが明らかとなった。

以上のような、4回の国際研究集会を通して、前近代の建築史研究をおこなう上で、東アジアの視座が不可欠であること、研究対象となる史料が現存建築・発掘遺構・絵画資料・文献史料にわたり、これらを横断的に扱う重要性が浮かび上がった。また古代日本を研究に開発した研究手法が日中韓の各国において、有効であることも見込まれ、さらなる研究の展開の礎を築くことができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 海野聡	4. 巻 2022
2. 論文標題 古代建築と渡来系技術	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 鞠智城シンポジウム2022成果報告書 渡来系技術から見た古代山城・鞠智城』	6. 最初と最後の頁 57-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 8
2. 論文標題 「門と糸坊にみる平城京と建築の接続」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『古代の都城と交通』	6. 最初と最後の頁 159-186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 3
2. 論文標題 「寺院建築と古代社会」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『古代寺院 新たに見えてきた生活と文化 』	6. 最初と最後の頁 195-261
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 1
2. 論文標題 「中世興福寺の伽藍復興に見る建築の 復古 思想」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『建築におけるオリジナルの価値』	6. 最初と最後の頁 9-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 なし
2. 論文標題 大報恩寺本堂と鎌倉時代の建築界	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『京都大報恩寺快慶・定慶のみほとけ：特別展』	6. 最初と最後の頁 206-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 なし
2. 論文標題 地方官衙政庁域の建築の格式と荘厳 国庁・郡庁正殿・国分寺金堂の比較から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 地方官衙政庁域の変遷と特質	6. 最初と最後の頁 11-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 34
2. 論文標題 古代寺院の幢幡とその構造	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 糸里制・古代都市研究	6. 最初と最後の頁 41-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 海野聡	4. 巻 2018
2. 論文標題 中山瓦窯の調査 第586次	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 奈良文化財研究所紀要	6. 最初と最後の頁 222-223
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計19件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 15件）

1. 発表者名 李 暉
2. 発表標題 「『营造法式』からみた中国宋代の大工道具」
3. 学会等名 第3回 国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 金碩顯
2. 発表標題 「韓国の大工道具」
3. 学会等名 第3回 国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 海野聡
2. 発表標題 「歴史資料としての日本の大工道具と工匠史料」
3. 学会等名 第3回 国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 海野聡
2. 発表標題 「日本における古代の貫状の水平材について」
3. 学会等名 古代東アジアの建築技術・情報に関する国際学術会議(国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 華 揚
2. 発表標題 「12 世紀以前の中国における貫状の材」
3. 学会等名 古代東アジアの建築技術・情報に関する国際学術会議（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 俞 莉娜
2. 発表標題 「12 世紀以前の中国における現存建築以外の建築資料と史料批判」
3. 学会等名 古代東アジアの建築技術・情報に関する国際学術会議（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 徐 孝源
2. 発表標題 「韓国古代建築における木部材の出土傾向と結合部特徴」
3. 学会等名 古代東アジアの建築技術・情報に関する国際学術会議（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 SATOSHI UNNO
2. 発表標題 Structural reinforcement for wooden buildings ; pre modern Japan focusing on penetrating tie beam
3. 学会等名 6th International Conference on Structural Health Assessment of Timber Structures (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 UNNO Satoashi
2. 発表標題 Securing system of wooden materials for preservation in Japan
3. 学会等名 22nd IIWC International Symposium, Bilbao (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 UNNO Satoshi
2. 発表標題 Study on structural system of multistoried building in ancient Japan
3. 学会等名 International Conference about Construction System in East ASIA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 UNNO Satoshi
2. 発表標題 Conservation History and Record of Wooden Architectural Heritage in JAPAN
3. 学会等名 特別講演、故宮古建築部 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 UNNO Satoshi
2. 発表標題 The Comparative study about structure system of wooden architecture in Ancient East Asia-
3. 学会等名 天津大学 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 UNNO Satoshi
2. 発表標題 Japanese Acceptance in East Asian Architecture
3. 学会等名 第3回東アジア木造建築史研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 UNNO Satoshi
2. 発表標題 Research of construction and maintenance system in Ancient Japan
3. 学会等名 International Conference about Construction System in East ASIA（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Li Hui
2. 発表標題 Research Achievements on Governmental Construction System in Tang Dynasty
3. 学会等名 International Conference about Construction System in East ASIA（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 海野聡
2. 発表標題 フォーラム1 7・8世紀の金堂から見た興道寺廃寺の建築的特徴
3. 学会等名 復元！興道寺廃寺跡をとりまく景色 ～古代寺院の景観を考える～（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 海野聡
2. 発表標題 奈良時代の寺院金堂と出雲国分寺金堂～復元学の視点から～
3. 学会等名 平成 30 年度 出雲国風土記連続講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 海野聡
2. 発表標題 古代校倉の特殊な建築技術と木材
3. 学会等名 第9回「春日奥山古事の森」普及啓発イベント（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 海野聡
2. 発表標題 建物の移築にみる藤原京・平城京
3. 学会等名 第 1 0 回東京講演会 藤原から平城へ - 平城遷都の謎を解く - （招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 田島公・海野聡企画・監修	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学史料編纂所	5. 総ページ数 90
3. 書名 『国際研究集会「御所(宮殿)・邸宅造営関係資料の地脈と新天地」報告集』 3	

1. 著者名 海野聡	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学芸出版社	5. 総ページ数 447
3. 書名 『日本建築史講義 : 木造建築がひもとく技術と社会』	

1. 著者名 海野 聡	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 264
3. 書名 森と木と建築の日本史	

1. 著者名 海野 聡	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 264
3. 書名 森と木と建築の日本史	

1. 著者名 海野 聡	4. 発行年 2022年
2. 出版社 学芸出版社	5. 総ページ数 448
3. 書名 日本建築史講義	

1. 著者名 海野 聡	4. 発行年 2019年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 332
3. 書名 『文化遺産と 復元学 遺跡・建築・庭園復元の理論と実践 』	

1. 著者名 海野 聡	4. 発行年 2018年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 336
3. 書名 建物が語る日本の歴史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	李 暉 (Li Hui) (30772751)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・アソシエイトフェロー (84604)	中国部分担当

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計4件

国際研究集会 古代東アジアの 建築技術 ・情報に関する国際 学術会議	開催年 2023年～2023年
国際研究集会 宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵「中井家文書」の新知見と東アジア工匠史料と道具の展望	開催年 2022年～2022年
国際研究集会 International Conference about Construction System in East ASIA	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 International Conference about Construction System in East ASIA	開催年 2019年～2019年

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	明知大学校	韓国建築歴史学会		
中国	北京大学	天津大学		